

中村素堂

わたくしは牧野富太郎先生に長いご垂眷をいただいたわけでもなく、また文化勲章に輝く先生のご専攻と相い触れるほどの植物通でもありませんが、花の咲く草木、特に高山植物をたくさん愛培し、そういう専門店・専門家を訪ね歩いておりました。そうしている間に、せつかくの貴重な草木を枯らして後悔している時、その途の権威者であられた先生を東京銀座の千疋屋の主人斉藤氏に紹介していただいた。またこの先生を囲む植物狂の集団の東京山草会の会員にも加えていただき、毎月の研究会にも出席させていただいたひとりなのである。

これはもちろん、戦前に浦和に住んでいた時代のことである。それが大戦を経てみると、もう食べられるものの研究ばかり盛んで、觀賞植物栽培などは気狂い沙汰であった。私どもの家族も、一家を養う大量食物の物量に怖れをなし、浦和から宮城・山形県境いの山間僻地に疎開していたが、それでも衣食の資を依然東京に求めていたものだから、ついに流れ流れて練馬区の今のところに土地を見つけて住みついた。

それからは子供たちの教育についても真剣に考えるようになったが、ある時、次男の入学試験用の写真を撮ってくれる店を探しているうちに、家から七、八分の距離のところに、「マキノ写真店」と実に哀れな板看板を階段の入口に掲げ、往來からいきなり二階のスタジオに入ってしまう店を見つけ、さっそく次男の入試写真を撮ってもらった。

次男の帰って来ての話に、「僕はあんな汚い写真屋を見たことがない……。台のついている写真機は古くて古くて、黒い塗料が剥けて地金の真鍮が見えている。その撮る時の音がまた大きくてビツクリするし、それに掛けてある黒い遮光幕にいたっては、紋付羽織の

古いのか何かだった」という。

私はこの話を聞いて、戦災に遇った写真屋さんが、残った一台の機械と腕を頼りに——というくらいに考えていた。ところがそれから一、二年経った冬の寒い夕方に、その二階のスタジオから浴衣ばかり三枚を重ね着した五十過ぎの女の人が駆け降りてきて、野菜やうどんなどを買い求め、またこの二階へかけ昇っていった。初めは気狂いではないかと思い、町のお店で訊ねると、写真屋の妻君であった。この寒いのにね——と憫んでいたとのこと、マアその話はそこまで。戦災者のイメージはそのまま持ち続けていた。

戦後もすこし落ち着いてくると、庭の土いじり病が復活して、戦前の集まりみたいなものは振わなくなっていたが、山へ登る人も多くなつて、私も手に入るものは買い蒐めて栽培していた。千疋屋へも出掛けて行って牧野博士にもお会いし、よくいろいろなことを教えていただいた。

小柄で瘦身、少しは白髪は手で掻きあげて、襟首へかかっている。最初の色は判らないが、藍ねず色の日やけした背広を一着して、ネクタイは省略しておられた。しかし袖に見えるフランネルのシャツは、よくよく継ぎがしてあるが、清潔に洗ってあり薄汚れた感じは全然ない。いかにも清貧を絵にしたような紳士であった。

戦前もそうであったが、牧野先生を中心に会を開いた時は、お帰りの時にひとり当たり五十銭の酬金をして、開催地から練馬大泉学園までの往復車代はわれわれの負担であった。

ところが先生は大変な話好きで、ひとつの軽い質問にも過分なくらい丁寧で、みなが納得するところまで必ずご説明下さるので、夜の更けた時分にはハラハラすることが一再ならずであった。当時の大泉町などは、ひと気のない所で、池袋乗り換えでどうして帰られるのか心配であった。(つづく)

〔筆間雑記〕中村素堂随筆集(昭和六十三年刊)より転載。
 (一)「書範」昭和五十七年六月